

満洲棄民と開拓団

昭和十六年八月、下のような文書が根上町長の名で出されている。

「第十一次開拓団後続先遣隊編成の件」として「百万石開拓団」員、三十名の募集の文書である。

当時は、現在と違って各家庭では、子沢山であつたし、耕すべき田畑は少なかった。

農民の、憧れは家中が豊かに食べていける、田畑があり、次男・三男にも多少の田畑を分けられるのが、一家の憧れでもあつた。

小学校の先生に聞けば、各家庭の状況が直ぐに分る時代でもあつた。

作家の「水上 勉」氏は、若い時代に、代用教員をしたというが、その際に「開拓団員」を、組織的に募集して歩いた状況を、彼の回顧文に書いている。「自分の薦めによつて、満洲開拓団に応募し」帰らぬ、「満洲棄民」になつた、少年たちの、鎮魂の文を、心を込めて記している。

鳥越城跡に建てられている、忠魂碑を、御覧になつたことがありますか。鳥越の町を見下ろして建っている、その碑には「一家全員の名」が刻まれているがある、山が多く、田畑が少ない村の人たちにとっては満洲の広野を、憧れたに違いない、一家、挙げて移住し、一家挙げて、満洲棄民となつた有様を涙せずに回顧出来ない。

満洲の野で、漸く落ち着いて農事に励んでいた家族全員が、ある日突然、ソ連進攻によつて全員死亡する。悲惨とはこの事である。

